

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

皆様こんにちは。実はこの原稿を私は今遠いベルリンの地から書いています。四月の末にここにやって来てから、早や三ヶ月以上が経ってしまいました。

なぜ私がこんな処に来ているのかと言いますと、長年の私の研究テーマである「絵画に使用される天然樹脂と合成樹脂のワニスの比較研究」をするために、野村国際財団に援助をいただき、ここベルリン国立博物館ラトゲン研究所、並びにドイツ政府産業化学研究所（BAM）という処に、はるばるやって来てしまったのです。

この二つの研究所は、ドイツの中でも屈指の設備と実績を誇っている、私の研究目的であるニス

の劣化測定やクロス度測定などを、大変スムーズに行う事が出来る所です。しかも！「ただの修復家」である私なんぞのことも心よく受け入れて下さる、大変大腹な（無謀な？）化学者の方々が居ます。……しかし、心よく引き受けてもらったものの……さあ、それからが大変！ 外国での美術館修復にはかなり慣れてはいる私にとっても、この様に「絵が一枚も無い」化学ラボラトリーの、所狭しとズラッと並ぶピーカーや分析機器に囲まれた環境は、来た当初はまさに「アーメン」と言った感じでした。ましてや今回は得意な仏語ではなく英語での化学的な会話の世界に突入！とあって、ストレスは毎日最大値を示していたのです。

はじめの一ヶ月は、山の様な文献を英文や仏文で読み漁り、毎回の分析方法や手順を考える事でアツという間に過ぎてしまいました。そしてやっと現在では、機械を使つての測定が終わり、コンピュータでデータをまとめる作業に入り、ホッとして居るところです……。

それでは、何故この様な苦勞をしてまで（全く！）これ程までに私がニスにこだわっているのか、その理由をお話しします。私のルーブル時代の師匠は、ニスの研究家として大変名高い修復家でした。そして私は彼と共にアングル、ダヴィッド、プリュードンなどの多くの

の作品にニスを引き直す作業をしていました。師匠は自宅に大規模なニス製造ラボを持ち、自ら造り出した特別なレシビのニス（それは天然樹脂であるダンマルを主体としていたが、その樹脂の持つ欠点を製造過程で機器や薬品に拠ってトリートメントする、この方法について彼はパテントを取得していた。）を使用していました。ルーブルはこの彼のニスを高く評価し、通常の2倍の賃金を支払って美術館の殆どの作品に対してニスの引き直し作業をする事を彼に要請しました。

そして或る日この彼の造り出したニスを使い、ルーブルのある一つの作品にニスを引いた際、その途端に、それは暗い背景を持つ風景の中、夜の河の中に美しい少女が殉教し流れてゆく画面を描いたものでしたが、それまで全く判らなかつた暗がりの風景の中に少女を発見し、声を挙げる一人の男性像がくつきりと浮かび上がったのです。

私はこの時、これ程迄に作品の見えがニスによって一変してしまう、ニスの効果というものに衝撃を覚えました。そしてふと回りを見渡してみると、同じダンマル樹脂を使用した他の修復家の造ったニスは、非常に光沢が強すぎて画面が見えづらかつたり、反対に白っぽくもるのに対して、彼のニスは、適度に色彩に深みを与えながらもおだやかな艶は決してキラキラと光を反射する事は無く、どの絵画も一様にその色彩の息吹きを強く吹

き返したかのように見えたのでした。この様に、ルーブルでニスというものの持つ役割りを深く考えさせられる経験を持ちましたが、また同時に私の居たルーブルでは、主にダンマル樹脂を使用する事が伝統的に修復者の間で行われて来たために、私自身の体感としてはこの天然ニスの感触に大変親しみを持つ事ともなつたのでした。

さて一方、この10年間というものの、私はことあるごとに外国の多くの名高い修復工房を短い研修のために訪れていました。イギリスでは合成樹脂のMS2Aというニスを多く使用しており、またベルギーでは天然ダンマル樹脂を塗布した後には紫外線プロテクトを目的としたパラロイド樹脂（アクリル樹脂）を二層目にコーティングするケースを多く目にしました。80年代に私がベルギー王立修復研究所を訪れた際、アトリエの戸棚の片隅には、茶色く変色して固まった古いケトン樹脂のビンが置かれていました。

これはケトンレジンNなどと呼ばれ、以前には大変修復者の間でもはやされた合成樹脂なのですが、その急激に起きる劣化のために、現在では全く使用されなくなつた代物でした。これら合成樹脂の研究は、1950年代より特にアメリカで進められ、そしてこのケトン樹脂は徐々にその組

成が改良され、現在ではドイツのBASF社がその開発・販売を行っています。改良前のケトン樹脂は、開発の初期の段階で化学者の奨めるままにヨーロッパの各地で修復家によつて絵画に使用されましたが、その結果は惨憺たるもので、その樹脂の持つ変色、非溶解性、脆さ等の欠点によつて、修復された絵画に甚大な被害を与えてしまいました。以来、ドイツの修復家の間ではケトン樹脂は全く使用されなくなり、現在でも保護ニスに関しては合成樹脂全般の使用を頑に拒否している状況です。

しかしこのドイツで画材店に足を向けてみると、樹脂や溶き油の置かれている棚の中に、（シクロヘキサノン）とラベルに書かれた合成樹脂のビンを発見する事が出来ます。（これをミネラルスピリットに溶かしてニスとして又はメデュムとして？）使用するのはつまずき、合成樹脂の使用を拒否している修復工房のもとに、いつかは画家自身が選択した合成樹脂が使われている絵画が届く事になるのです。

私は10年前程から、各国で使用されているニスのサンプルを集め始めました。そして過去にどんなトラブルがあり、今はどんな考えを持ってニスを選択しているか等の意識調査も行いました。そして今はこのベルリンでそれらの収集したサンプル

の比較テストをしている、という訳なのです。今、アメリカは試行錯誤の末に、シクロヘキサノン樹脂（還元ケトン）から離れてアルデヒド樹脂に向かおうとしています。データを見る限り、結果は大変良好な様ですが、実際には天然樹脂と合成樹脂の劣化比較は樹脂の特性が違うために大変困難です。しかし、少なくとも修復家はただ勧められるままに材料を貴重な絵画に何の「意識」も持たないまま使用するべきでは無い事、そしてまたやみくもに新しい材料を拒絶し続ける事も間違いであらうと私は考えています。大切な事は、「知ろう」とする事ではないか。さまざまな材料の特性を熟知していれば、生じ得る危険は最小限に、回避されるだろう。

私はこれ等の研究を通じて、画材産業のためぬ努力の現場も垣間見る事が出来ました。絵の具の歴史はそのまま人類の産業テクノロジーの進歩を反映しているものです。そして修復の技術もまた同じくそうした化学の進歩と共に発達してきた以上、たとえ門外漢の自分でも、「苦手」では済まされないのでと自分を励ましつつ、今日も頭の痛い外国語の文献に取り組んでいる（トホホ）私です。

（つづく）



イギリス・テイトギャラリー修復研究所のニスのテストサンプル



ベルリン国立博物館ラトゲン研究所ラボラトリーにて

かゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。